

躑躅ヶ崎館跡(甲府市)

つつじがさき

築城年代:永正16年(1519年)、築城者:武田信虎

ここは武田神社(躑躅ヶ崎館跡)への参道



ここが武田神社の神橋



神橋から左手を見たところ/躑躅ヶ崎館跡の水濠(外濠)となっている/右手は埋め戻されて駐車場と化している





説明坂が立っている/左手の標柱には「史蹟 武田氏館跡」と記されている



国指定史跡

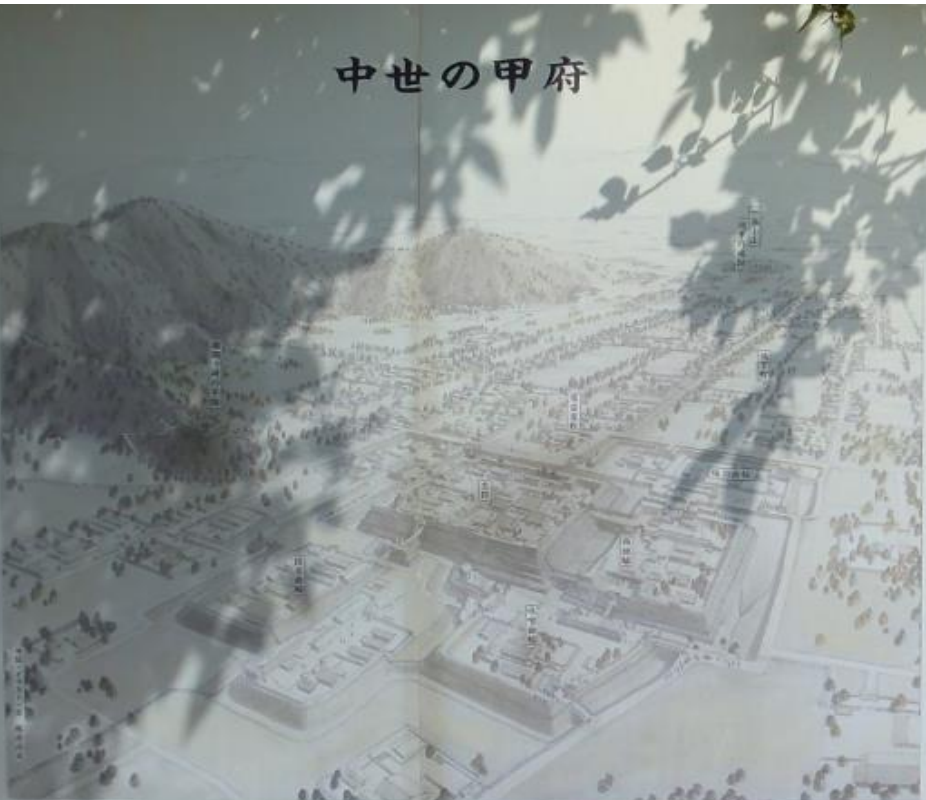
たけだしやかたあと
武田氏館跡(躰躰ヶ崎館跡)

指定年月日 昭和十三年五月三十日

所在地 甲府市古府中町・大手三丁目・屋形三丁目
管理団体 甲府市

「武田氏館」は、「躰躰ヶ崎館」とも呼ばれ、武田信玄の父、信虎が、永正十六年(一五一九)に石和からこの地に、館を移したことから始まります。その後、信玄・勝頼と、武田家当主の館として使われました。そして武田家の滅びた後、文禄年間に館の南方に今の甲府城が作られるまでの、約七十年にわたり、この館一帯は、領国の政治・経済と文化の中心地として発展しました。

中世の甲府



平成元年三月

回りのいくつかの副郭とによって構成された平城形式のもので、館の回りには、家臣の屋敷が建てられ、南方一帯には格子状に整備された道路に沿って、城下町が開けていました。

この館と城下町は、戦国時代の大名の本拠として、第一級の規模と質を誇るものです。

文化庁
文部科学委員会
山梨県教育委員会
甲府市教育委員会



武田神社全圖



御祭神

武田晴信命（信玄公）

鎮座地

山梨県甲府市古府中町二、六一一

御祭神在世中の居館、躑躅ヶ崎館跡

由緒

武田晴信公は清和源氏新羅三郎義光公の後裔で、大永元年（五二一）十一月三日、武田信虎公の長男として石水寺要害城に生まれました。幼名を太郎、童名を勝千代と名乗り、天文五年（五三六）三月の元服に際し、將軍足利義晴から「晴」の一字を賜り晴信といい、従五位下大膳大夫に叙されました。

天文十年（一五四一）信虎公の後継者として、甲斐の国主となり、以後三十有余年領国の経営に力を尽くされました。

天正元年（一五七三）四月十二日、天下統一の夢を抱き京に上る途中、信州伊那駒場で病没されました。（行年五十三歳）

大正四年（一九一五）大正天皇の即位に際し、晴信公に従一位が追贈され、これを機として山梨県民はその徳を慕い、官民が致協力して、社殿を造営、大正八年（一九一九）四月十二日、鎮座祭が盛大に齋行されました。

例祭

四月十二日（御祭神御命日）

祭典終了後、神輿渡御が行われ、甲冑に身を固めた武田十四将の騎馬が神輿に供奉し、豪華かつ勇壮な神輿の列が桜花の咲く中、甲府市内に繰り広げられ賑わいを見せております。

こちらにも説明板が立っている



古の府



武田二十四将一覧表

-  武田御前少輔信康
Takeda Gomonosuke Nobukane
-  横田備中守高松
Yokota Bichu no Kami Takamatsu
-  小山田左兵衛尉信茂
Oyamada Saburo no Juroshi Nobumasa
-  土屋右衛門尉基次
Tsuchiya Emon no Juroshi Munetsugu
-  山本勘助晴季
Yamamoto Kanetsugu
-  奥田源太左衛門尉信綱
Okuda Genpachiro no Juroshi Nobunaga
-  甘利備前守虎春
Amari Bizen no Kami Torikazu
-  真田彈正忠幸隆
Maeda Denju no Chuji Takayuki
-  高坂彈正忠吉信
Takasaka Denju no Chuji Nobunobu
-  穴山玄蕃頭信忠
Anayama Utsunobito no Chuji Nobuchika
-  板垣殿河守信方
Itahakura Denka no Kami Nobuyuki
-  内藤修理亮昌豊
Naito Shuzo no Ryō Chikayoshi
-  山内三郎右兵衛尉信景
Yamauchi Sanjuro no Emon no Juroshi Nobunaka
-  馬場長連守信春
Bama Chōren no Kami Nobumasa
-  宇田左衛門守清頼
Uda Emon no Kami Kiyonaga
-  三枝勘解由左衛門尉守友
Saiji Kanetsugu no Emon no Juroshi Munetomo
-  原隼人治部丞
Hara Hayato no Juroshi
-  小幡山城守虎盛
Obata Yamanaka no Kami Toritaka
-  武田典範信繁
Takeda Norinori no Chuji Nobunobu
-  秋山伯耆守信茂
Akiyama Hōkyū no Kami Nobumasa
-  飯沼兵部少輔信直
Iinuma Heibu no Juroshi Nobunaka
-  菅原守虎丸
Sugawara Morikuma
-  小幡兼佐守忠盛
Obata Kanetsugu no Chuji Nobunobu

現代の図



濠が取り囲んでいる



周囲には家臣団の屋敷が立ち並ぶ



両サイドには土塁がある/左手に説明坂が立っている



太宰治の愛でた桜



武田神社から甲府駅へ向かう途中の住宅街甲府市御崎町(現・朝日五丁目)に、「太宰治僑居(きょうきよ)跡」の石碑が建っています。

ここで、作家・太宰治は昭和十四年一月より約八ヶ月の間、妻、美知子と新婚時代を過ごし『富嶽百景』『女生徒』『新樹の言葉』などの作品を執筆しました。夫婦生活を送る中で、太宰は当神社の例祭と境内の桜についても『春昼(しゅんちゅう)』という作品に残しています。

『春昼』(しゅんちゅう)

太宰 治

四月十一日

前略——けさは上天気ゆえ、家内と妹を連れて、武田神社へ、桜を見に行く。母を誘ったのであるが、母は、おなかの工合い悪く留守。武田神社は、武田信玄を祭ってあって、毎年、四月十二日に大祭があり、そのころには、ちようと境内の桜が満開なのである。四月十二日は、信玄が生れた日だとか、死んだ日だとか、家内も妹も仔細らしく説明してくれるのだが、私には、それが怪しく思われる。サクラの満開の日と、生れた日と、こんなにピッタリ合うなんて、なんだか、怪しい。話がうますぎると思う。神主さんの、からくりではないかとさえ、疑いたくなるのである。

桜は、こぼれるように咲いていた。

「散らず、散らずみ。」

「いや、散りず、散りずみ。」

「ちがいます。散りみ、散り、みず。」

みんな笑った。

お祭りのまえの日、というものは、清潔で若々しく、しんと緊張していいものだ。

境内は、塵一つとどめず掃き清められていた。

——後略——

正面に拝殿が見える



右手を見たところ/こちらは「東曲輪」のエリア



左手を見たところ/こちらは「中曲輪」のエリア



振り返って今来た参道方向を見たところ



こちらが参道



これが拝殿



これは拝殿の右側面



これが中門(左手)と本殿(右手)



甲陽武能殿(右手)と榎天神社(左手)



これは「武田水琴窟」



「武田水琴窟」

すいきんくつ

土中に底に小さな穴をあけたカメを埋め、そこにわずかな水を流す。水はその穴から水滴となって落ち、カメの中で反響し、琴の音にも似た澄んだ音色を地中に響かせる。一つの音文化の極致である。

江戸期、文化文政の時代に庭師によって考案されたこの技術は、茶室のつくばいや庭先の手水鉢に設えられ、数奇者たちに愛でられた。昨今は「癒し」の音として注目を集めております。



※竹筒に耳をつけてお聞きください。
※鉢の水はけっしてかき出さないでください。

武田神社社務所



これは「姫の井戸のお水」



姫の井戸のお水

この水は境内「姫の井戸」のお水です。

「姫の井戸」は躑躅ヶ崎屋形の内でも其の生活の中心となる場所に有り、一説によると信玄公の御息女誕生の折、産湯に使用した事に因り「姫の井戸」と名付けられたと云い、また「茶之湯の井戸」とも言われ、この井戸より発見された茶釜等の品々が現在宝物殿に展示されており、当時の生活を推測する貴重な資料であるとともに、この茶釜は勝頼公（信玄公継嗣）が京よりの客をもてなす茶会の折使用した茶釜とも云われており、屋形内で茶を点てるときにはこの井戸の水を用いたと伝えられています。

武田神社々務所

これは「信玄公御使用井戸」



信玄公
御使用井戸

躑躅ヶ崎館つっじがさきやかたの中心部に

掘られた井戸で、当時の

生活を偲ばせる貴重

な遺構である。





これは宝物殿





鉄筋コンクリート造



説明板が立っている



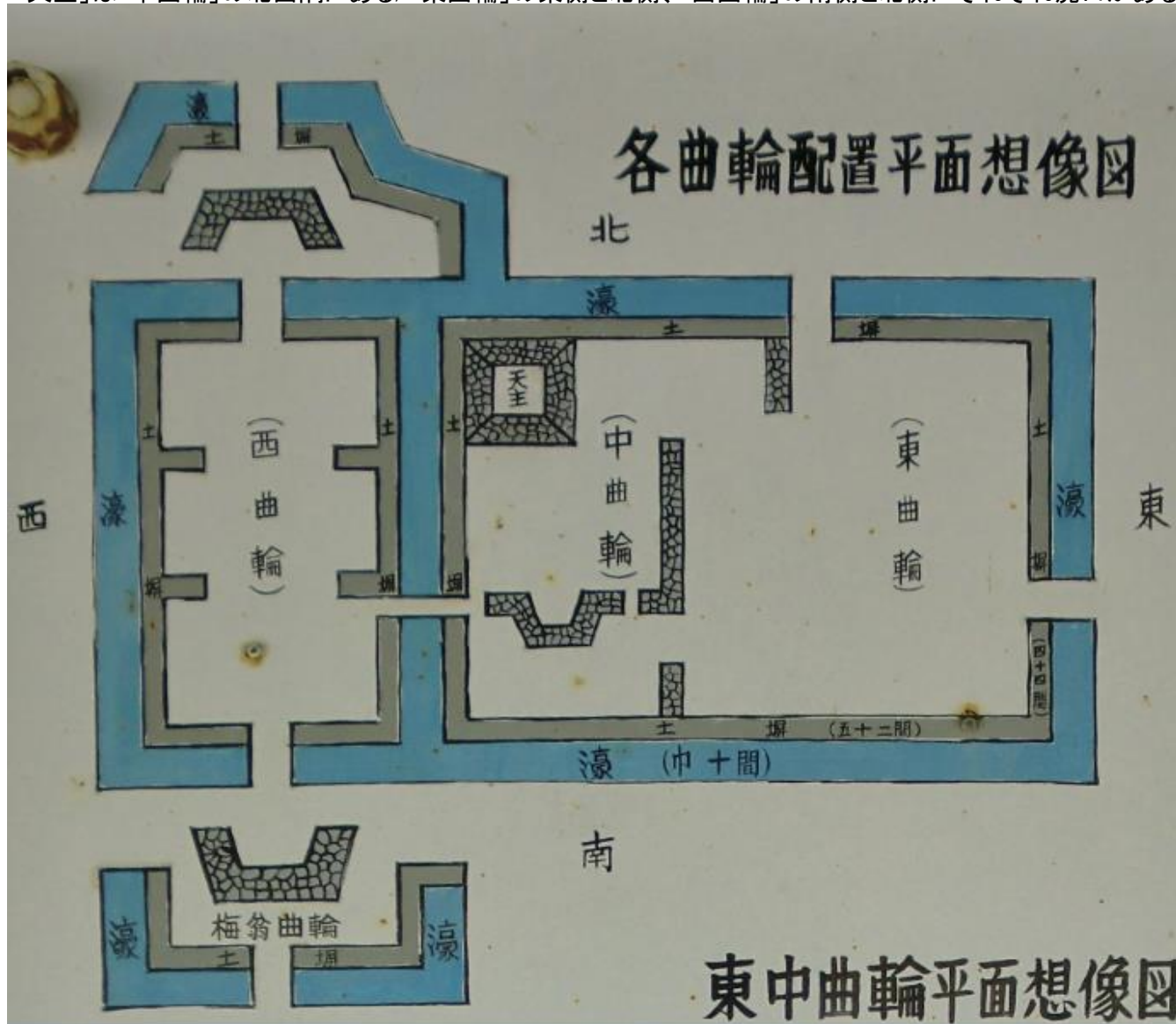
躑躅ヶ崎館(武田氏館)跡

この地は武田氏三代(信虎)信玄(勝頼)の居館にして躑躅ヶ崎の西方にあるところから後世この別称を用いたと伝えられる屋形一帯の壕壘縄張り
は左図の如き構成でほぼ現存し
往時を偲ぶに足る。居館中心地域に
ついては各説あるも一応左図の如き
屋形配置が想像される。

武田氏館配置図



「東曲輪」と「中曲輪」のエリアが主郭部で「西曲輪」とは濠で区画されている/それらの周りを外濠が取り巻いている/「西曲輪」の南北には巨大な馬出のような「梅扇曲輪」、「味噌曲輪」があり、各々濠に囲まれている/「天主」は「中曲輪」の北西隅にある/「東曲輪」の東側と北側、「西曲輪」の南側と北側にそれぞれ虎口がある



東側の虎口が「大手虎口(大手門跡)」、西側の虎口は「西曲輪」との土橋



それでは「東曲輪」の東側にある「大手門跡」を見てみよう/左右は土塁



土塁と石垣



反対側から見たところ



ここが東側にある「大手門跡」





武田神社大手門

「大手門跡」を入ったすぐのエリアが「東曲輪」



右手を見たところ



左手を見たところ



土塁は南方向に続いている



これは神橋から境内に入ったところで右手(東曲輪)を見たところ/土塁が東方向に延びている



その先は北方向に折れて続いている



この先は先程の「大手門跡」



さて、「東曲輪」の西側のこのエリアが「中曲輪」



右手を見たところ/当時はこの辺りに主殿があった



左手を見たところ



「中曲輪」の南側にも土塁がある



土塁を東側から西方向に見たところ



これは土塁に登って同じく東側から西方向を見たところ/前方で右手に折れている



振り返って東方向を見たところ



さて、ここから先(西側)のエリアが「西曲輪」



左手を見たところ/先程の右手に折れた土塁がここに延びて来ている



この先で東側へ折れている



右手を見たところ



この土塁は北方向に延びている/右手に社務所がある



土塁の足元には石垣が残る



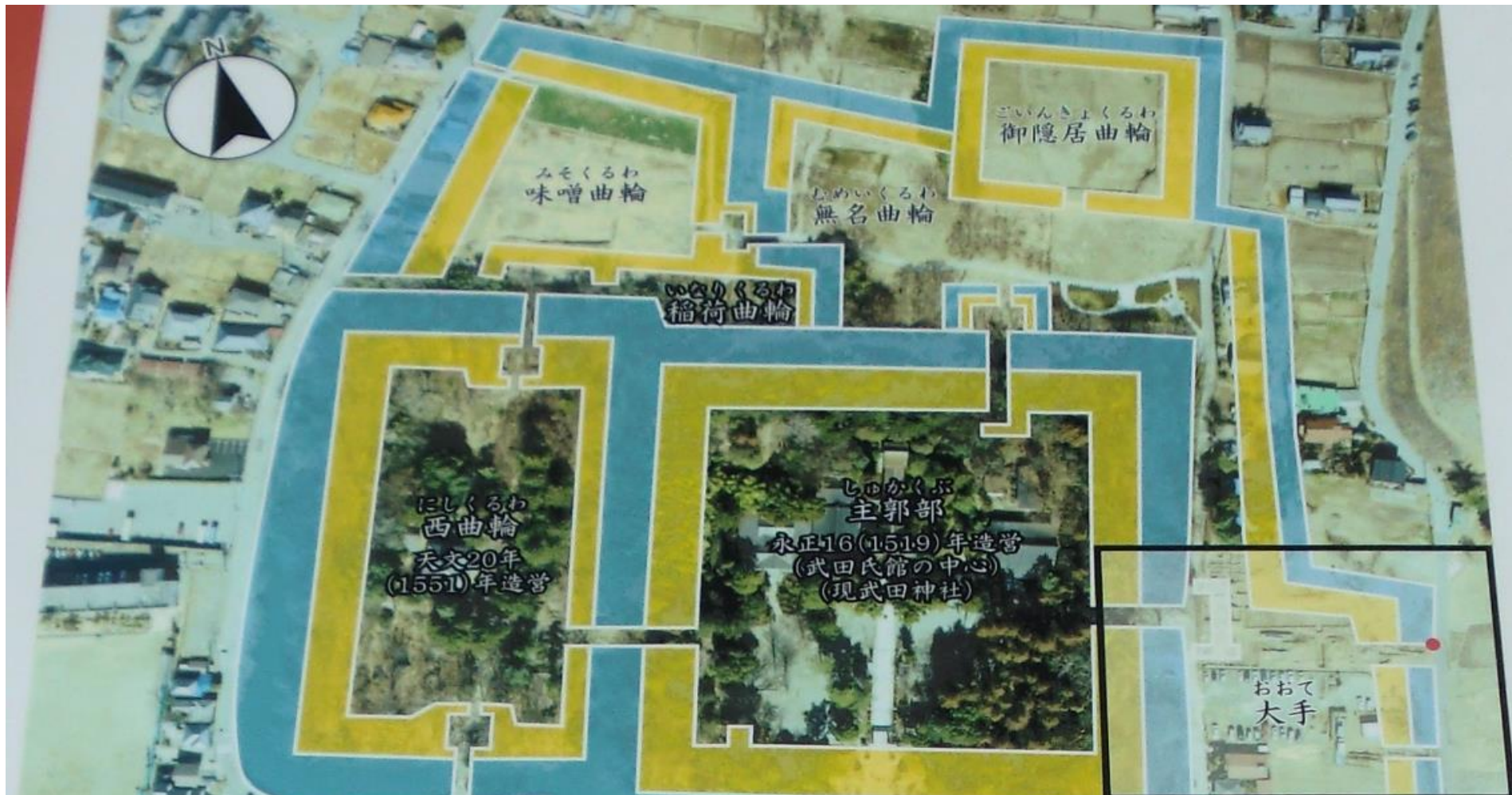
更に北方向を見たところ/この先に「天守台跡」があるはずだが立入禁止



振り返って東方向に「中曲輪」を見たところ



それでは「大手」→「西曲輪」→「味噌曲輪」→「御隠居曲輪」→「無名曲輪」→「稲荷曲輪」→「梅扇曲輪」の順で見て行こう





国指定史跡武田氏館跡 (古絵図・地形などから復元した館跡全体図)

ここは「大手門跡」入口の土橋



土橋から右手の濠を見たところ



右手から土橋を見たところ/土橋の石垣が見て取れる



土橋から左手の濠を見たところ/水を湛えている



さて、振り返って東方向を見ると「大手石塁」がある/手前に説明坂がある



武田氏館跡大手

現在地は、戦国時代の武田氏館の正門にあたる大手に位置しています。大手の発掘調査では、大手門を守備するために築かれた大手石壁が検出されるとともに、その下層からは武田氏の時代に築かれたと考えられる三日月堀などが発見されています。そのため、大手の整備では武田氏滅亡後に甲斐を支配した豊臣秀吉の家臣によって築かれた大手石壁などを復元整備しました。



上空からみた大手石壁と三日月堀の重複関係

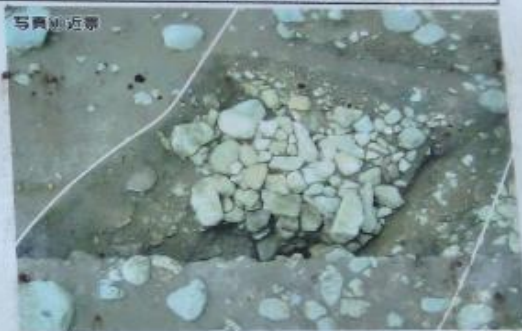
大手三日月堀

武田氏滅亡後に築かれた大手石壁と重複する位置から三日月堀と呼ばれる半月形の堀跡が発見されています。三日月堀は、其高出と考えられる竊居の出入口を守る防御の一環として築かれたもので、本堀は内側に土塁を伴っていたと考えられます。丸堀は、武田氏が支配した長谷津や御油、新馬場(西郷)などの城郭に数多く存在することから、武田氏が用いた築城技法の一つと考えられています。

図示した大手三日月堀の輪郭は、北側を除き部分的な確認調査の結果をもとに全体規模を想定しています。南側については、本大手石壁と重複しているために未調査となっていますが、三日月堀の埋め立てが不十分であったために発生した埋藏物による石垣の崩壊が石壁築造で確認されています。よって、大手三日月堀の規模は、全長約30m、幅約4m、深さは確認された範囲で約2mでした。大手石壁の下層に埋もれていたこともあり、古絵図や文獻にも記録されず、発掘調査以前はその存在を確認することはできませんでした。発掘調査の結果、大手三日月堀は、写真①のように堀の中に多数の礎石が投げ込まれた状態で発見されましたので、其上に位置する大手石壁との関係も考慮すると、武田氏から徳川氏・豊臣氏への領主交代によって人為的に埋められ、後却されたと考えられます。



写真①



写真②近景

大手石壁

武田氏館の正門である大手門を守るために築かれた石垣の構造物です。二面所に階段が取り付けられていることから、上部には何らかの建造物が存在したと考えられます。石垣は自然石を横方向に配着することを意識して積み上げた野積積みと穿れる技法で築かれており、裏側には石垣の安定と排水を意図した無数の礫石が詰め込まれています。主に安山岩が使用されていますが、花崗岩なども混在することから、近隣で産出する石材が集められたと考えられます。石材には欠けなどの加工の痕跡はなく、自然石がそのまま使用されているのも特徴の一つです。

このような築石を有する石構みの技術は、戦国時代の甲斐には存在しなかったものであり、西日本から導入されたと考えられます。そのため、大手石壁は、武田氏滅亡後に甲斐を治めた徳川氏が豊臣氏配下の大名によって新たに築かれた可能性が高いと考えられます。発掘調査当初は、石垣築造以外の多くは後世の開発により失われていましたが、古絵図なども参考にして欠損箇所は積み直し、破損・劣化が著しい箇所は解体修理して仕舞の姿に復元整備しました。



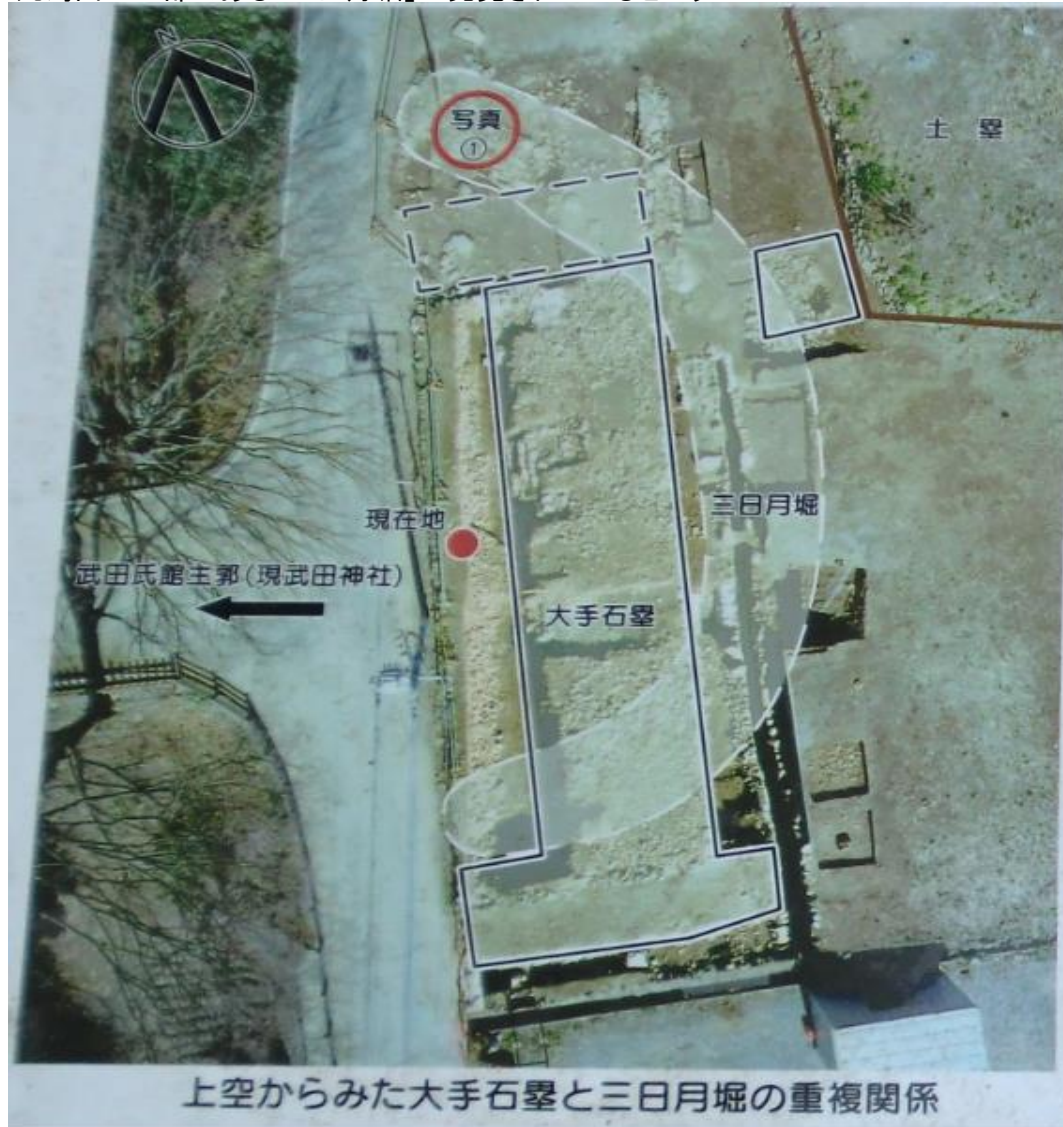
西面

解体修理前の大手石壁の石垣

上：西面
下：東面



「大手石塁」は武田氏滅亡後に築かれたもので、その下層に武田氏の時代に築かれた丸馬出の一部である「三日月堀」が発見されているという



上空からみた大手石塁と三日月堀の重複関係

正面が復元された武田氏館の正門である大手門を守るために築かれた総石垣の「大手石塁」/櫓や塀などの建物の基礎/左手が「大手門跡」



そこで右手(東方向)を見たところ/説明坂がある





↑武田氏館跡全体図



↑大手門周辺ゾーン配置図

大手門周辺ゾーンの整備箇所 Scientific Reconstructed Areas

<p>③ 大手石塁 Main Zettification of the front gate 大手門を守るための様々な形状の建物の基礎と考えられ、中央と両側の2箇所に階段が設けられている。発掘調査では、奥側土階の石積が新鮮な状態であったが、現在は土階の石のみ、北側においては完全に消失していた。そのため本整備においては発掘調査に加え土階跡などを基に石の敷出し・復元を行った。</p>	<p>↓「奥側土階土階跡」より「土階中」</p> <p>↓復元後の様子</p>
<p>④ 土塁・土塁 About - Earthen fortification 武田氏館跡東側一帯を囲むように伸びる堀と土塁を総称して土塁・土塁と呼んでいる。大手石塁の周辺には整備前から土塁が残されており、土塁に埋められた溝跡は、一帯で確認された間に埋められたことが明らかになった。本整備においては、発掘調査で確認された基礎跡の遺構を基に土塁の形を復元した。</p>	<p>↓「古府中城下輪郭」</p> <p>↓復元後の様子</p>
<p>⑤ 土橋、虎口石階段 Earthen bridge - Stone steps of protective gate 館跡には古道である駒池小路から入る2箇所の虎口（出入口）が確認されている。大手石塁の北段では、土橋を築いた場所から石階跡が検出されたため、遺構に基づき修復・復元を行った。一方、南段では、発掘調査で土橋が確認され、やや狭い虎口であったことが確認された。</p>	<p>↓「古府中城下輪郭」</p> <p>↓復元後の様子</p>
<p>⑥ 厩跡 Remains of the stable 大手石塁のすぐ裏から特殊な柱配置の遺構が検出された。中央で表示した独立柱建物跡は、江戸時代の建築者に記された最建物の形式と類似し、古館にもこの形式に「厩跡」の存在を示す表記のみ見られることから、遺跡として復元し整備を行った。</p>	<p>↓「古府中城下輪郭」</p> <p>↓平面表示の様子</p>

史跡武田氏館跡大手門周辺ゾーン Ōtemon Front Gate Area of Takeda Clan Castle Fort Historic Site

武田氏館跡は、戦国大名武田氏三代（信虎・信玄・勝頼）の本拠として築かれた一辺が約200mの正方形をした居館であり、東に位置する「藤縄ヶ崎」と呼ばれる尾根の麓にあることから、一般には「藤縄ヶ崎館」の呼び名で親しまれている。

武田信虎によって永正16年（1519）に築かれた初期の館は、現在武田神社が鎮座する主郭のみであったと考えられ、堀や土塁の規模も現在の半分程度であったことが発掘調査で明らかになっている。館の規模が現在のようになったのは、武田領国を中部一帯に拡大した武田信玄の時代と考えられ、西曲輪・味増曲輪・御膳屋曲輪等が増設された。

ここ大手門周辺ゾーンは、戦国時代の館の正面玄関に当たり、武田信玄を始め、多くの武将・文化人が通った道である。（南側の水堀を渡る入口は、大正時代の武田神社創建時に参道として切り開かれた道である）

Ōtemon front gate area of Takeda clan castle fort historic site is the main portal of the castle fort during the height of Warring States period in the 16th century. Numerous war horses such as Shingen Takeda passed through here.

当地区の整備工事前に実施した発掘調査では、大手門一帯を囲むように設けられた堀や土塁、出入口の石階段などが確認され、主郭に至る土橋の正面からは、大手石塁や堀とみられる建物跡が検出された。

同時に大手石塁の下層からは、武田氏時代の遺構である三日月堀と呼ばれる出入口を守る施設が新たに発見されるとともに、家臣や職人の屋敷とみられる区画も確認されたことから、武田氏の時代には城下町が展開していたことが明らかとなった。

当ゾーンにおいては、様々な議論の末、遺構として最上層に残存する土塁・石塁も、館の歴史的な変遷を知る上では重要な施設であると位置づけられたため、武田氏滅亡後に付設された曲輪内の構造をより明確にする方針で整備を行なった。

甲府市教育委員会

史跡武田氏館跡大手

大手門周辺ゾーンの右手が躑躅ヶ崎



「a」は上記の通り、「b」～「d」を見てみよう

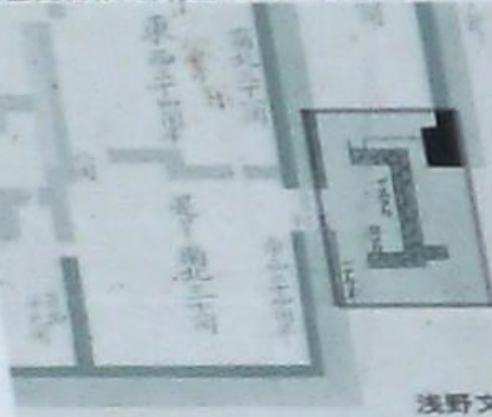


おおよそせきるい
a 大手石塁

Stone fortification of the front gate

大手門を守るための櫓や堀などの建物の基礎と考えられ、中央と南側の2箇所に階段が設けられている。発掘調査では、東側と南側の石積が良好な状態で出土したが、西側は基底部の石のみ、北側においては完全に消滅していた。そのため本整備においては発掘遺構に加え古絵図などを基に石の積直し・復元を行った。

↓『諸国古城之絵図』より「古府中」



浅野文庫蔵

↓ 修理・復元後の様子

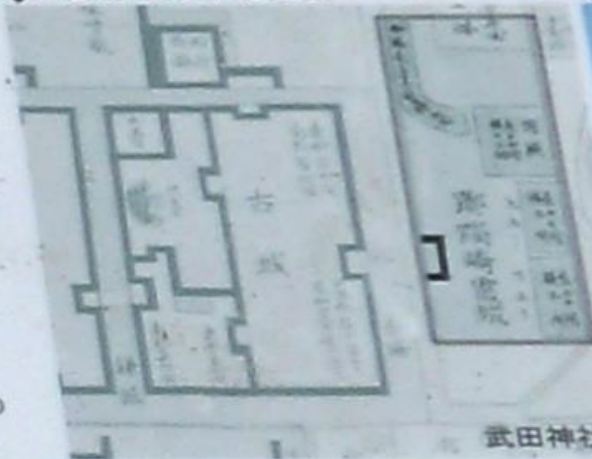


そうぼり どるい
b 惣堀・土塁

Moat · Earthen fortification

武田氏館跡東側一帯を囲い込むように伸びる堀と土塁を総称して惣堀・土塁と呼んでいる。大手石塁の周辺には整備前から土塁が残されており、土橋に挟まれた場所は、一時宅地化された際に破壊されたことが明らかになった。本整備においては、発掘調査で確認された基底部の遺構を基に土塁の形態を復元した。

↓「古府中城下絵図」



武田神社蔵

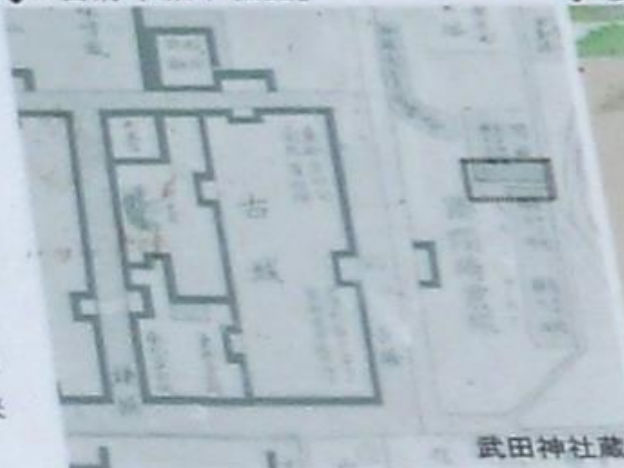
↓ 復元整備後の様子



c とぼし こぐちいしかいだん
土橋・虎口石階段
Earthen bridge · Staircase of protective gate

惣堀には古道である鍛冶小路から入る2箇所の虎口（出入口）が確認されている。大手石塁の北段では、土橋を渡った場所から石階段が発掘されたため、遺構に基づき修理・復元を行った。一方、南段では、発掘調査で細い土橋が確認され、やや狭い虎口であったことが確認された。

↓「古府中城下絵図」



武田神社蔵

↓復元整備後の様子



d うまやあと
厩跡
Remains of the stable

大手石塁のすぐ脇から特殊な柱配置の掘立柱建物跡が発見された。

平面で表示した掘立柱建物跡は、江戸時代の建築書に記された厩建物の形式と類似し、古絵図にもこの付近に「御厩」の存在を示す表記がみられることから、厩跡として推定し整備を行ってゐる。

↓「古府中城下絵図」



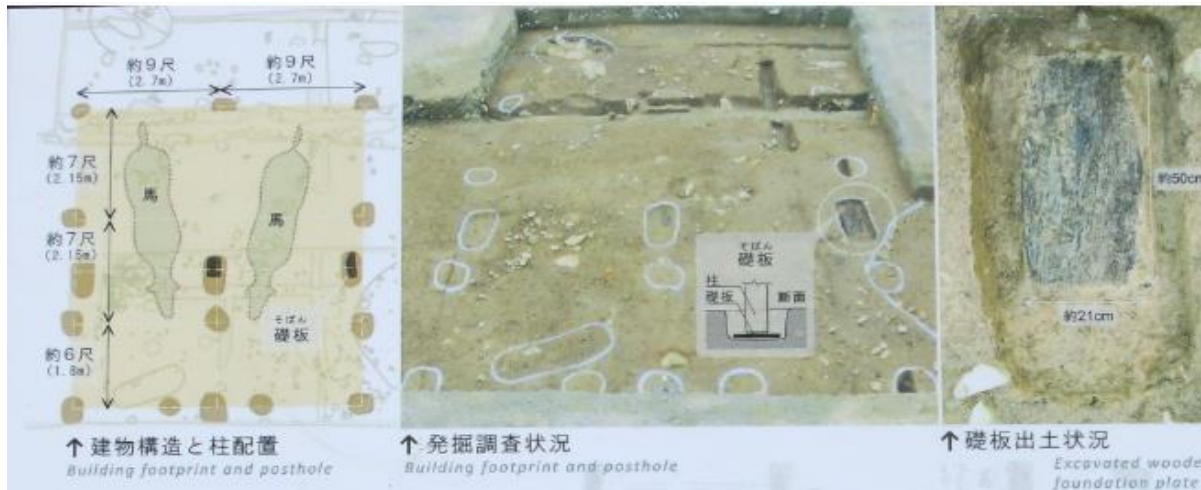
大仙
 遠光
 惠林寺蔵

↓平面表示の様子



これが「d」の「厩跡」/ここにも説明坂がある





↑ 建物構造と柱配置
Building footprint and posthole

↑ 発掘調査状況
Building footprint and posthole

↑ 礎板出土状況
Excavated wooden foundation plate

うまや

厩跡平面表示

Posthole Display of the Stable

武田氏館跡の大手門を守備するために築かれた大手石塁の南側で発掘された建物跡は、地面に柱を埋めて建てられた掘立柱建物跡である。建物跡中央に位置する3基の長方形の柱穴からは、柱を据えるための礎板が出土し、これまでの武田氏館跡の調査事例でも類例がなく、上図で明示する柱配置も戦国時代では特殊な間隔が採用されている。

当建物の用途は、その特殊な柱間から江戸初期に成立した、『匠明』に記された「厩」の建物形式に酷似し、甲州市恵林寺所蔵の「甲州古城勝頼以前図」にも、現在地付近に「御厩」の表記があることと合わせて、外厩と考えられる。

時期的には大手石塁の東端部延長線上に計画的に建てられたと考えられることから、武田氏滅亡後に存在した厩であると推測される。

甲府市教育委員会

これは大手門周辺ゾーンを南側から北方向に見たところ



そこで右手を見ると土塁と説明板がある



これは南側の土橋/ここが南側の虎口



そこで左手に土塁を見たところ



土橋を渡って振り返って見たところ



そこで右手に惣堀を見たところ/前方(北方向)にも土橋がある/右手は「鍛冶小路」と呼ばれる古道



これがその北側の土橋/北側の虎口である/前方が石階段となっていて、ここが「c」の「土橋・虎口石階段」



説明坂がある





国指定史跡武田氏館跡 (古絵図・地形などから復元した館跡全体図)

別名「薮ヶ崎館跡」と呼ばれる史跡武田氏館跡は、永正16年(1519)に武田信虎によって築かれ、信玄・勝頼と武田氏三代の本拠地として使用されました。二町(200m)四方の規模を誇る主郭部は、武田氏の生活の場であると同時に領国を統治するための政庁であり、武田氏の勢力拡大に伴い、曲輪と呼ばれる堀と土塁で区画された付属施設が主郭部の周囲に増設されていきました。天正9年(1581)に武田勝頼は新府城(韮崎市)を築城し、本拠地を移転したため、武田氏館は一時機能を失います。

しかし、翌年武田氏が滅亡すると、織田氏・徳川氏・豊臣氏によって甲斐国の統治拠点として再整備され、その後甲府城が築城されるまで使用されたと考えられます。館の正面玄関にあたる大手には惣堀と土塁で囲まれた曲輪が確認されています。整備前の発掘調査によって、武田氏滅亡後に築かれた石壁などとともに新たに造営された曲輪であることが明らかになりました。



大手石壁と三日月堀

武田氏館の正面玄関にあたる大手正面には、堀の出入口である虎口を守るために築かれた石壁が存在します。石壁は、石積みの技法などから武田氏滅亡後に築かれたものと考えられます。

また、石壁の直下からは新たに三日月堀が発見されました。三日月堀は、丸馬出と呼ばれる堀の出入口を守る施設の一部であり、内側に土塁を伴っている場合が多いようです。丸馬出は、武田氏領国内で数多く確認されていることから、武田氏が積極的に用いた施設と考えられています。山梨県では新府城跡(韮崎市)に続き2例目となりました。

このように、武田氏時代の遺構とその後の勢力によって築かれた遺構が重なり合って発見されています。



発掘された武田氏館跡大手

大手東側には惣堀と土塁で囲まれた曲輪の存在が確認されています。曲輪内の広場のうち上段部では、惣堀に架かる北側土橋の曲輪側から石階段が発見され、その下段に付設されている南側土橋では門礎石が確認されています。

土橋から館跡へ向かって進むと、武田氏館の正面玄関である大手土橋の前に武田氏滅亡後に築かれた石壁が存在しています。石壁直下には三日月堀など武田氏時代の生活面が確認されているため、現在大手東側でみられる施設は、武田氏滅亡後に甲斐を支配した新たな領主によって大きく造り直されたと考えられます。

武田氏館跡は戦国大名武田氏の本拠地であるとともに、その後の勢力による甲斐国統治の拠点としての側面もあります。その意味で戦国の動乱期から天下統一へ向かう歴史全体の動きをしる上で貴重な史跡です。



国指定史跡武田氏館跡 (古絵図・地形などから復元した館跡全体図)

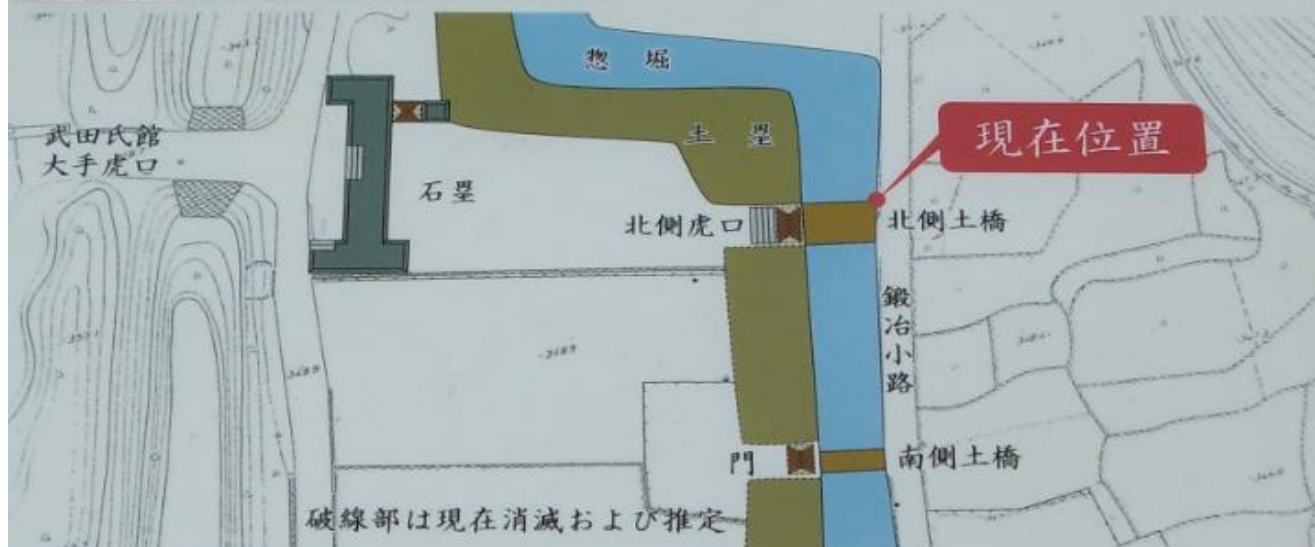


おおよそおのり
みかづきぼり
大手石塁と三日月堀

武田氏館の正面玄関にあたる大手正面には、館の出入口である虎口を守るために築かれた石塁が存在します。石塁は、石積みの技法などから武田氏滅亡後に築かれたものと考えられます。

また、石塁の直下からは新たに三日月堀が発見されました。三日月堀は、丸馬出と呼ばれる館の出入口を守る施設の一部であり、内側に土塁を伴っている場合が多いようです。丸馬出は、武田氏領国内で数多く確認されていることから、武田氏が積極的に用いた施設と考えられています。山梨県では新府城跡(韮崎市)に続き2例目となりました。

このように、武田氏時代の遺構とその後の勢力によって築かれた遺構が重なり合って発見されています。



これは少し北方向に進んで、南方向に「惣堀・土塁」を見たところ/前方は北側の土橋/左手が「鍛冶小路」



これはそこで西方向に北側の「惣堀・土塁」を見たところ/前方の木々の中が武田神社(主郭部)



反対側から東方向に「惣堀・土塁」を見たところ



さて、正面が北側の土橋の先にある虎口石階段/正面前方に「大手石塁」が見える



北側の土橋上で南方向に「惣堀・土塁」を見たところ/前方は南側の土橋/左手が「鍛冶小路」



これは同じく土塁の内側で南方向を見たところ/手前に復元された北側虎口石階段が見て取れる



振り返ると土塁の手前に説明坂がある





そらほりきたがわにこころ
惣堀北側虎口 (虎口とは城館の出入口のことです)

武田氏館の正面玄関にあたる大手東側一帯には惣堀と土壁で囲まれた曲輪が形成されたことが明らかとなっています。惣堀には整備前から古道である鍛冶小路に面して南北2箇所の土橋が架けられていました。土橋は、貞享3年(1686)の古府中村絵図(武田神社蔵)に描かれているので、江戸時代前期にはすでに存在していたようです。

発掘調査以前は、鍛冶小路側から土橋をわたると通路は途絶えていましたが(写真①)、調査を進めると、石を配した階段が発見されました。石階段は全体を粘土混じりの礫石で覆われた状態で発見されているので(写真②)、自然堆積によって埋まったものではなく、曲輪の機能が停止した段階で人為的に封じ込められたと考えられます。

約400年の時を経て姿を現した戦国時代のこの階段は、南北両端が後世の開発等により破壊されていますが、大手東側に築かれた曲輪の虎口と考えられ、その規模は、全長約2.2m、幅約6.2mを計ります(写真③)。虎口の門につきましては、水路などによる後世の開削が著しく、礎石など門の存在を裏づける痕跡を確認することはできませんでしたが、比較的良好的状態で残されていた階段下の広場では確認されませんでしたので、門は階段上に存在した可能性が高いと考えられます。整備事業では、戦国時代の石階段は保護するために埋設し、その上に同じような形で復元しています。



写真① 発掘調査着手時



写真② 階段部の埋没状況



写真③ 発掘調査後の階段

さて、その土塁の上を西方向に進んでみよう/土塁は前方で右手(北方向)に折れている



これは土塁上で南西方向に大手門周辺ゾーンを見たところ/右端は「大手石塁」



土塁の折れた先を見よう/土塁はここで消滅しているが惣堀は右手(北方向)に続いている



北方向に進むと、惣堀はこんな状態になっている



そこからもう少し北方向へ進んで振り返って南方向を見たところ/これが惣堀の名残り



さてもう一度、土塁上に登って東方向に「惣堀・土塁」を見たところ/右手前方に北側虎口石階段が見える



これはその土塁の内側で東方向を見たところ/右手前方に北側虎口石階段が見える



そこで北方向に折れている土塁を見たところ/左手は「大手石塁」



この先で土塁は消滅している



これは土塁の消滅している辺りから南東方向に大手門周辺ゾーンを見たところ/正面は「大手石塁」/右手が「大手門跡」



さて、次は「西曲輪」を見てみよう/「中曲輪」西側の虎口から土橋を渡って「西曲輪」へと進もう/虎口の両サイドに石垣が残っている



左手の石垣を見たところ



右手の石垣を見たところ



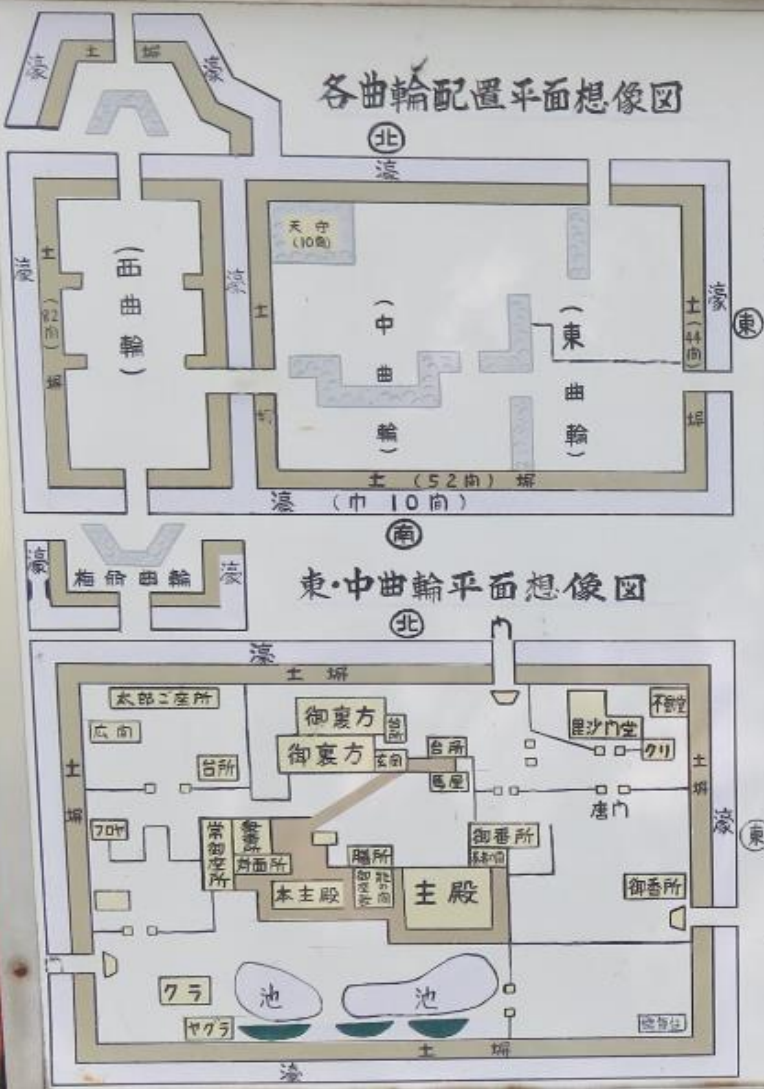
正面が土塁の虎口の先にある土橋/右手に説明板が立っている



躑躅ヶ崎館(武田氏居館)跡

この地は武田氏三代(信虎・信玄・勝頼)の居館にして躑躅ヶ崎の西方にあるところから後世この別称を用いたと伝えられる。屋形一帯の壕罫・縄張りは左図の如き構成でほぼ現存し往時を偲ぶに足る。居館中心地域については各説あるも一応左図の如き屋形配置が想像される。

武田氏居館配置図



そこから振り返って虎口方向を見たところ



左手の石垣を見たところ



右手の石垣を見たところ



土橋上で南方向を見たところ/水濠となっている



それを反対に南側から見たところ/正面前方奥が土橋



これは土橋上で北方向を見たところ/こちらも水量は僅かであるが水濠となっている



土橋を渡ってから振り返って虎口方向を見たところ



さて、これは「西曲輪」を東側から西方向に見たところ



左手方向を見ると土塁のようなものが見える



右手を見ると何やら行われているようだ



これは発掘調査



こんな塩梅



更に右手も発掘調査が行われていたようだ



さて、左手の土塁のようなものの所に行くと、そこは「西曲輪南側柵形虎口」であった/北側から南方向に見たところ



右手を見たところ



左手を見たところ/土塁の上に登る階段もある



土塁の上に登ってみる



前方で左手に折れている



右手を見下ろしたところ/枡形虎口となっている



虎口の土塁を見下ろしたところ



これは左手に折れた先の土塁/この先で止まっている



その先は先程の土橋の所の水濠



右手を見たところ/外濠が見える



さて、反対側(右手)の土塁にも上に登る階段がある/こちらも土塁は左手から右手(西方向)に折れて外濠に沿って続いている



その外濠に沿った外濠を見たところ/前方でまた右手に折れて北方向に続いている



北方向(前方)へと続く土塁/右手が「西曲輪」



それでは土塁の上に登ってみよう/前方で右手(西方向)に折れている



外濠に沿って西方向に折れた土塁を見たところ/前方でまた右手(北方向)に折れている



振り返って枡形虎口を見下ろしたところ



こんな塩梅



さて、これは「西曲輪南側枅形虎口」を南方向に外濠を渡って振り返って「西曲輪」方向を見たところ



正面は外濠を渡る土橋/「みその橋」と云うそうだ



左手を見たところ/外濠は前方(西方向)で右手(北方向)に折れている/土塁もそれに沿っているわけだ



左手を見たところ/外濠は右手の方に続き、武田神社の神橋に至る/左手に折れている所は西と中の曲輪を繋ぐ土橋へと至る



枅形虎口を南側から見たところ



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



枡形内を見たところ



ここで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



西側から東方向に見たところ



東側から西方向に見たところ



虎口を見たところ



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



振り返って左手を見たところ



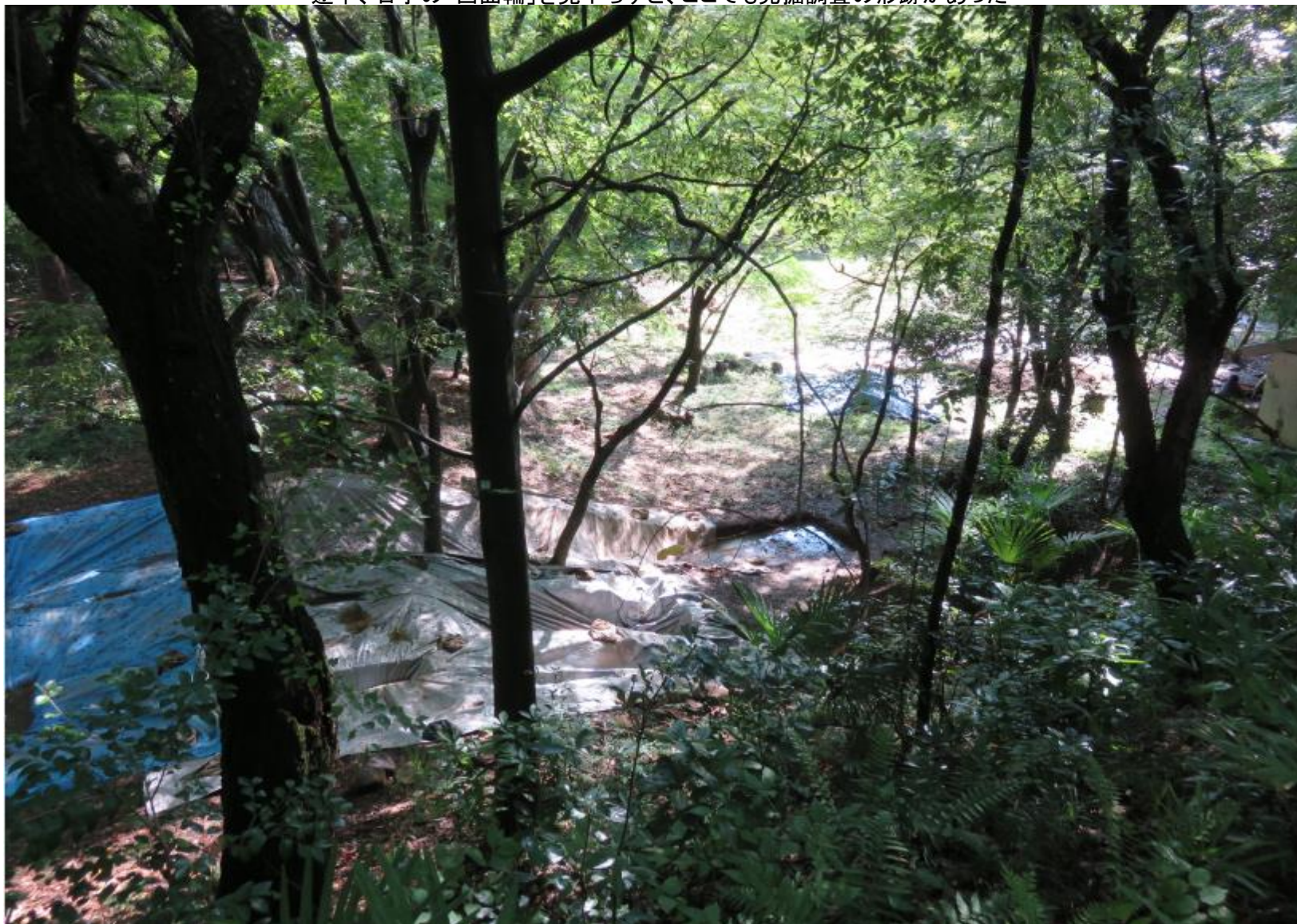
同じく右手を見たところ



さて、西側の外濠に沿った土塁上を北方向に進んでみよう



途中、右手の「西曲輪」を見下ろすと、ここでも発掘調査の形跡があった



更に進むと土塁は右手(東方向)に折れている



東方向に折れて進む/右手が「西曲輪」/左手には先程からの外濠は見られない(埋められて消滅してしまったようだ)



少し進むと土塁が止まっている/ここが「西曲輪北側枡形虎口」



右手を見たところ



これはその虎口から南方向に「西曲輪」を見たところ



振り返って虎口方向を見たところ



南側から見た「西曲輪北側枡形虎口」



左手を見たところ/説明坂がある



劣化していて良く読めない

武田氏館跡西曲輪北側枡形虎口南門



南門



発掘調査時の枡形虎口



石壇の下から礎石が見える

西曲輪の内側に位置する南門は、北門に比べて土塁・土壇部の石壇と門の規模が大きく、門の構造自体も違っていたと考えられます。石壇は、野面積みと呼ばれる自然石をそのまま積上げる技法で積まれており、表面には平石と呼ばれる礎石が使用されています。このような石壇の技法は、西日本から導入されたものであり、現在見られる石壇は、武田氏滅亡後に設けられたと考えられます。その石壇と重複する位置から発掘調査で門跡の礎石から確認されています。石壇よりも古い時代であり、武田氏の時代に存在した門の可能性が高いと考えられています。

礎石から推定される門の規模は、幅約2.5m、奥行約1.5mであり、土塁の幅約9mであり、土壇の幅約5mと推定されています。現状では、西曲輪の門跡と重複する位置から発掘調査で礎石を確認しています。現状では、武田氏滅亡後に石壇が設けられていますが、枡形虎口は、武田氏の築城技術を表すものとされています。

武田氏館跡西曲輪北側枡形虎口



現在位置



左図のように、土塁で囲まれ、門で仕切られた枡形が一升餅の形をしています。2箇所、門も意匠的に異なる変形した枡形の形をしています。

西曲輪は、武田信玄の長男であった武田義信と駿河の今川義元の娘との結婚に合わせて天文20年(1551)に新造された戦宿の御館です。義信は謀反の罪に罪一、東光寺で自害したため、西曲輪のその後の利用は明らかになっていません。

現在地は、西曲輪の内側に位置し、枡形虎口と呼ばれる出入りの構造が残っています。虎口とは、城郭の出入口のことを指し、門と土塁で仕切られた広場の形が一升餅のように形が異なることから、枡形虎口と呼ばれています。枡形虎口には2箇所、門が設けられており、石壇のある通路部分の発掘調査で礎石を確認しています。

現状では、武田氏滅亡後に石壇が設けられていますが、枡形虎口は、武田氏の築城技術を表すものとされています。

右手を見たところ/この虎口に南門があったようだ



枡形内部を見たところ/前方の虎口は少しずれていて喰い違い虎口となっている



左手を見たところ



右手を見たところ



その右手の土塁上に登ったところ



左手の枡形虎口を見下ろしたところ/右手に土橋が見える



その土橋を見たところ/両サイドは濠となっている/ここは北側の外濠が残っているようだ



土塁の右手(東方向)を見るとこちらにも濠がある



更に右手(南方向)を見たところ/この濠は西と中の曲輪を繋ぐ土橋に至る/右手が「西曲輪」



これはその濠越しに「中曲輪」方向(東方向)を見たところ



下の濠を見下ろしたところ



この上は「中曲輪」の北西隅に当たる所で「天守台跡」の辺り/斜面に石垣の名残りが見える



アップで見たところ



さて、これは虎口から北方向に土橋を見たところ



土橋側から振り返って南方向を見たところ



左手を見たところ/こちらは石塁/説明坂がある



ただだしやかたあとにしくるわきたがわますがたこち
武田氏館跡西曲輪北側枡形虎口



左図のように、土塁で囲まれ、門で仕切られた広場の形が四角い枡のようになっています。2箇所の門は位置を変えて敵の侵入の勢いを削ぐ形態になっています。

西曲輪は、武田信玄の長男であった武田義信と駿河の今川義元の娘との結婚に合わせて天文20年(1551)に築造された義信の新居です。義信は謀反の罪に問われ、東光寺で自害したため、西曲輪のその後の利用は明らかになっていません。

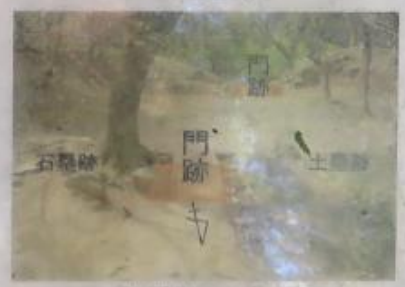
現在地は、西曲輪の北側に位置し、枡形虎口と呼ばれる出入口の構造が残っています。虎口とは、城館の出入口のことを指し、門と土塁で仕切られた広場の形が一升枡のように四角いことから、枡形虎口と呼ばれています。枡形虎口には2箇所に門が設けられており、石垣のある通路部分の発掘調査で礎石を確認しています。

現状では、武田氏滅亡後に石垣が設けられていますが、枡形虎口は、武田氏の築城技術を代表する構造物とされています。

ただだしやかたあとにしくるわきたがわますがたこちまたもん
武田氏館跡西曲輪北側枡形虎口北門



調査前



発掘調査時の枡形虎口



通路から礎石が4枚出土

西曲輪の外側に位置する北門は、土橋を渡って曲輪へ入るための最初の門となっています。両側には低い石垣が残されていますが、西(右)は低い土塁、東(左)は低い石垣となっており、整備前は、土塁部分は完全に消滅していました。通路幅は、約2.2m、奥行きは約2.6mと非常に狭い間口であることから、大軍で攻め込まれないよう工夫されていたと思われます。

発掘調査では写真のように通路西側から門跡の礎石を4枚検出していますが、石垣との軸線や礎石の間隔が異なることから、2度の建て替えがあったと推測されます。

残念ながら、東側の礎石列を確認することができませんでしたので、どのような門が建てられていたのかわかりませんが、四本柱の小型の門であったと考えられます。

右手を見たところ/こちらは土塁だったと云う/この虎口には北門があったようだ



これが土橋/北方向に見たところ



左手の濠を見たところ



右手の濠を見たところ



これは土橋を渡って振り返って南方向を見たところ



さて、これは「西曲輪北側枡形虎口」から土橋を渡って進んだ所で、北方向を見たところ/前方一帯が「味噌曲輪」



その左手(北西方向)を見たところ/ここも「味噌曲輪」のエリア



更に左手(西方向)を見たところ/この左手は外濠のライン/右手前方には土塁のようなマウンドがある



近寄って見たところ/土塁の足元に石積みが見られる/右手前方にも石積みのような所が見える



アップで見たところ/石垣の名残りか



これは右手(北東方向)を見たところ/ここも「味噌曲輪」のエリア



更に右手を見たところ/この右手は外濠のライン



さて、「西曲輪」に戻ると、さまざまな石造物があった



武田菱と北斗七星の絵柄を持つ軍配が描かれた石碑



こんなものも





さて、ここは再び「西曲輪南側枡形虎口」に戻り、南方向を見たところで、この前方の一角が「梅扇曲輪」のエリアとなっている



右手から「梅扇曲輪」を廻ってみよう



これは右手に進んで水濠の南西角から城壘を見たところ



右手(東方向)を見たところ/水際の部分は石垣で保護された「腰巻石垣」となっている



左手(北方向)を見たところ



これは北方向に水濠に沿って道路を進んだ所/ここまで来ると右手にある水濠は消滅してしまっている



ここから先程の「西曲輪北側柵形虎口」から土橋を渡って進んだ所に行けるようだ



ここは階段を上がって東方向に少し進んだ所で、右手が外濠のライン、左手は「味噌曲輪」の土塁



左手の土塁を見たところ/前方左奥の山に詰城である「要害山城跡」があるようだ



さて、ここは「梅扇曲輪」の西側にある一寸した公園/前方に説明坂が立っている



ところどころ細かい違いはあるが、先にあった説明板の内容と同じようだ



これは「梅扇曲輪」を南西隅から北東方向に見たところ/砂利の所が土塁のようだ



左手を見たところ



右手を見たところ/水濠と土墨の感じが見て取れる



後を振り向くとさまざまな石造物があった



南側から北方向に見たところ/前方の木々の中が武田神社



南東隅から北西方向に見たところ



左手を見たところ



右手を見たところ



フェンスの中を東側から西方向に見たところ



さて、ここは武田神社の北側に廻り、北東側から南西方向に見たところで、前方の木々の中が武田神社/手前の畑のエリアは「御隠居曲輪」と思われる



ここは外濠の北東隅で、正面は一寸した公園/北西方向を見たところ



左手には外濠が見える



ここは御隠居曲輪南スポット公園と呼ばれるらしい



その北側に道があり、看板があった



や がた さま
お屋形様の散歩道

戦国時代の大名の住まいを屋形といい、室町将軍家が認めた格式の高い大名を特に「お屋形」と呼ぶようになりました。

この散策路の名称は、武田氏の館（やがた屋形）に住んだ信玄がお屋形様と呼ばれたことから名づけられました。

甲府市教育委員会

これが「お屋形様の散歩道」/東側から西方向に見たところ



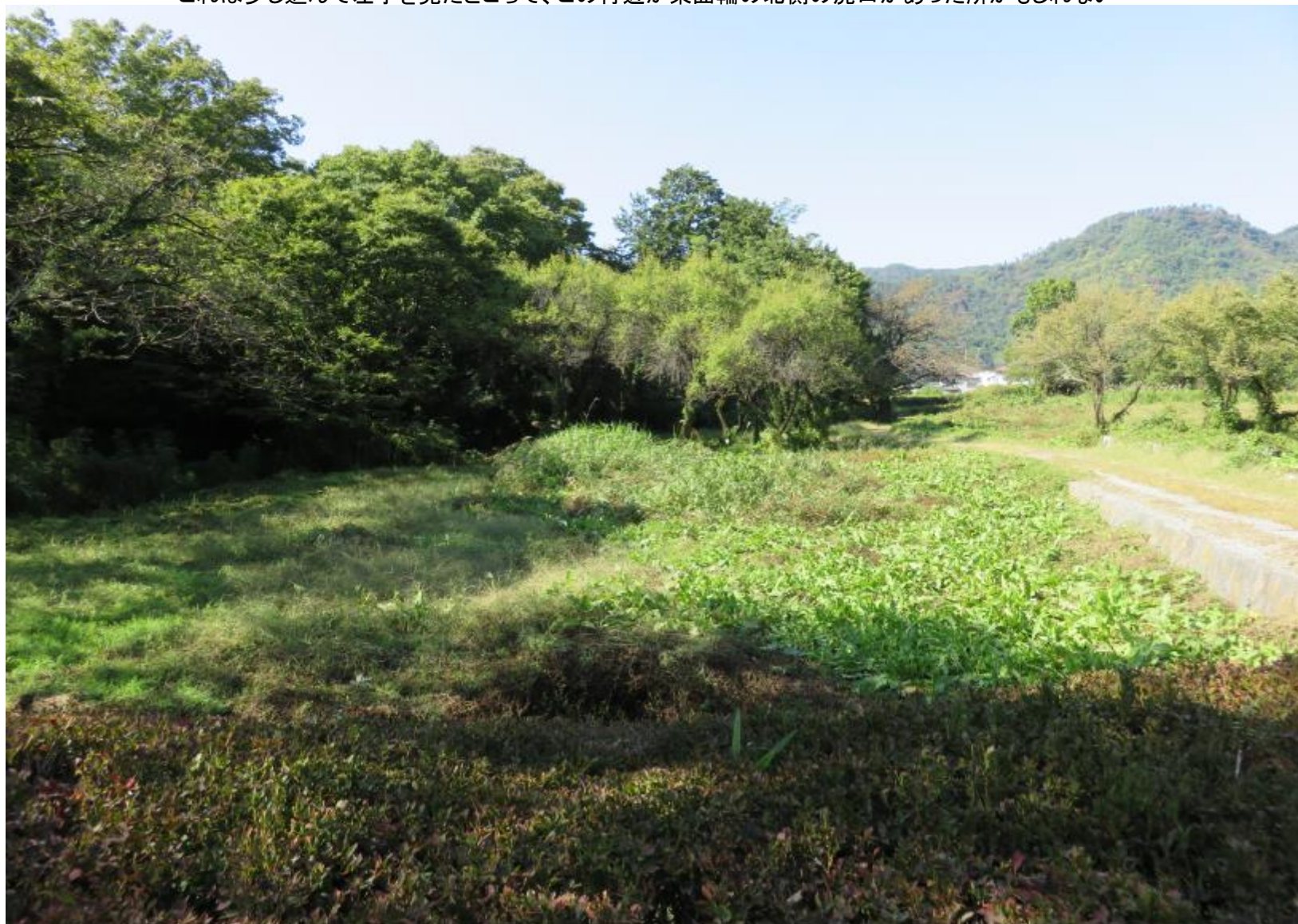
これはそこで右手を見たところで、ここが「御隠居曲輪」のエリア



さて、「お屋形様の散歩道」を西方向に進んでみよう/左手が武田神社



これは少し進んで左手を見たところで、この付近が東曲輪の北側の虎口があった所かもしれない



そこから右手方向を見た周辺は「無名曲輪」とされているエリアか



その右手のこのエリアもそうかもしれない



更に西方向へ進む/左手は濠になっている/散歩道は前方で左手に折れている



左手に進む



正面の木々の中が武田神社/散歩道は前方でまた右手(西方向)に折れている



ここで左手を見ると先程の濠がある/水が佇んでいる/その右手は少し高くなっている/左手が今進んで来た散歩道



これがその少し高くなったマウンド/西側から東方向に見たところ/左手が濠



マウンドの上ってみると墓地となっているようだ/西側から東方向に見たところ



そのマウンドの先はここで下がっている



そこで振り返って西方向を見たところ



右手を見ると階段がある



下りて行くと土橋のような状態になっている/両サイドは濠/この前方上は散歩道



左手の濠を見たところ



右手の濠を見たところ/水が佇んでいる



さて、散歩道を更に西方向に進もう/この辺りは「稲荷曲輪」とされるエリアかも/左手は外濠のライン



前方右手を見るとこのエリアは「味噌曲輪」/この少し先が既に行った「西曲輪北側枡形虎口」から土橋を渡って進んだ所



さて、次は周囲の家臣団の屋敷跡を見てみよう/ここは神橋近くにある穴山玄蕃頭信君の屋敷跡



信玄・勝頼を
補佐した一族



甲府市観光ホームページ



あなやまげんぼのかみのぶきみ
穴山玄蕃頭信君

(天文十年～天正十年六月二日)

穴山氏は、甲斐源氏の支流で、穴山を本拠地にしつつ、河内領(南巨摩郡一帯)を支配した強豪。信君は、穴山信友の子で、生母は信玄の姉南松院殿、正室は信玄の息女見松院殿であり、極めて重用されたことがわかる。永禄元年(一五五八)ころより、父信友に代わって穴山家の取り仕切り、同三年十月に父が死去すると、正式に家督を相続した。穴山家当主となって、最初に経験した大合戦が、永禄四年(一五六一)の川中島の戦いで、この時は武田軍本隊の左翼を守っていた。信君は、今川氏とも親交が深く、信玄の今川攻めに際しては、今川家臣の調略を担ったという。長篠の合戦で、山県昌景が戦死したため、駿河江尻城主に就任し、織田・徳川・北条三氏の圧力を防いだ。武田氏滅亡の際は、織田・徳川氏に降伏し、武田氏の再興を夢見たが果たせないまま、本能寺の変に巻き込まれて死去した。

発掘調査中のようだ



ここは大手門周辺ゾーン の南側にある高坂弾正忠昌信の屋敷跡





高坂弾正忠昌信
高坂弾正忠昌信は、徳川幕府の重臣として活躍した。その功績は、幕府の発展に大きく貢献した。この屋敷敷跡は、その功績を後世に伝えるために設置された。

高坂弾正忠昌信屋敷敷跡

信玄の寵臣で

『甲陽軍鑑』

の作者



甲府市観光ホームページ



高坂弾正忠昌信

(大永七年～天正六年六月十四日)

高坂弾正の名で知られるが、実際には香坂弾正忠虎綱、後に本姓に戻って春日虎綱と称している。石和の老百姓春日大隅の子で、天文十一年(一五四二)に信玄に見いだされて近習となり、その後使番を経て、天文二十一年(一五五二)に足輕大将に抜擢された。翌年には小諸城代に、永禄三年(一五六〇)ころ海津城代に任命されるなど、異例の出世を遂げた。高坂弾正は、川中島の豪族を指揮下に置き、上杉謙信の南下に備えた。永禄四年の川中島の戦いなどで活躍した。天正三年の長篠の戦いで、山県・馬場らの宿将が戦死したことに危機感を覚え、信玄の言行や行動哲学などをまとめた書物を書き上げ、勝頼の側近達に贈ったといい、これが『甲陽軍鑑』の原本とされる。天正六年(一五七八)の謙信死後、上杉景勝と勝頼の同盟交渉役を担ったが、実現しないまま病没した。

そこから北方向に大手門周辺ゾーンを見たところ/この付近では家臣団の屋敷跡も発掘されているようだ



さて、最後に武田信玄ゆかりの積翠寺を見てみよう/前方右手に説明坂が立っている



定文化財

田信玄和漢連句

良純親王墨跡・硯箱・煙草盆

指定年月日

昭和四十六年十月八日（市指定）

所在地

甲府市上積翠寺九八四番地

所有者

積翠寺

臨濟宗妙心寺の本寺である雲城の南麓に位置し、古くは石水

山、本尊は釈迦如来を安置する。寺伝々、開山を行基、印典

硯石の銘、武田信玄の誕生した寺とも言

には産湯井戸や産湯天神がある。

年（一五四六）信玄は、後奈良天皇の勅使とし、甲斐におも

田大納言実澄・四之中納言基遠と東光寺願栖・法泉寺湖月の

名を当寺に迎え、和漢連句を催した。この時の一巻が当寺に

守宝として現存している。

五・七・五の和句と呼ばれる和歌と漢句と呼ばれる五言の

連歌の一種であり、当時流行した知的な遊戯であった。信

玄を積極的に移入したことや、武芸とともに文芸にも関心が

高く和歌や漢詩の優れた作者であったこと、示す貴重な

御陽成天皇の第八皇子であるが、八ノ宮とも呼ばれた。

（一六四三）罪を得て甲州湯村に流罪となり、ついで下積翠

寺に移った。十二年、ついで三珠町の草野寺に五年を過す。

帰洛した。興因寺にいた時積翠寺にまたたびを訪れられた

。常愛用された硯箱と煙草盆が当寺に伝わり、また

和歌・色紙など親王自筆の墨跡が一通あり、保存されて

往時かしのはれる遺品である。

十二年三月

甲府市教育委員会

右手は機山武田信玄公誕生之寺 と彫られた石碑



これは不動堂らしい/右手に説明板、左手に石碑が立っている



積翠寺由緒

当寺は臨濟宗妙心寺末にして行基菩薩の開創に由る跡
倉時代曼念国師の弟子竺峯でくまう和尚中興開山なり
大永六年（一五二一年）

福島兵庫乱入の節飯田河原の合戦信康大夫当寺に留
り期に臨み一男子を産むこれ即ち信玄なり境内に古跡
の天神在湯の井あり並西に唐厨あり高八九尺泉こ
れに激して瀑となるよりくま水寺の井名になり村名に
なると甲陽軍鑑に依う積翠寺名因は曼念国師の坐禅修り
寺室に信玄像及び天文十五年後奈良天皇の勅使にても
下向せられし三條四辻二郷と杜寺にて催せられし信玄
公の和漢联句一連並に良純王親王より仰岩和尚に贈ら
れし書簡等々現存す

「武田不動尊 信玄公像 毘沙門天」と刻まれた石碑



不動堂の中には「寺宝 信玄公像」が鎮座する



アップで見たところ



さて、本堂の裏手に廻ると一寸した庭園がある



その右奥を見ると「信玄公産湯の井戸」があった



信玄公産湯の井戸

大永元年（五三年）飯田河原の合戦の時信虎夫人（大井夫人）は戦乱を避け当寺に留りて信玄を出生したのである。その時産湯に使った井戸です。



これがその井戸



境内にはさまざまな石造物があった



その背後を見ると前方に甲府市内が見える



これは境内の右手に見える武田氏の詰城の要害山城跡のある要害山



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/008yamanashi/053tsutsujigasaki/tsutsujigasaki.html>

<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Lake/4393/yamanashi/kouhusi.htm#tutuji>

<https://akiou.wordpress.com/2014/08/02/tsutsuji-ga-saki/>

<https://www.city.kofu.yamanashi.jp/shingenkou-no-machi/tsutsujigasaki.html>

<http://www.zephyr.dti.ne.jp/bushi/siseki/takedaji.htm>

<http://www.pcpulab.mydns.jp/main/takedajiniya.htm>

<http://www.geocities.jp/qbpb900/tutuzigasakiyakata.html>

<http://ss-yawa.sakura.ne.jp/menew/zenkoku/shiseki/chubu/tutuigasaki.i/tutuigasaki.i.html>

<http://www.uraken.net/museum/castle/shiro15.html>

